

# 総合的な学習の時間に関するカリキュラムマネジメントと体制づくり

中村 有佐\*1・安井 智恵\*2

## 概要

「総合的な学習の時間」は、「目標」や「内容」などカリキュラム全般を各学校において設定するものであることから、各学校の裁量が大きく、その教育効果の比較も難しい上に、「実践の在り方」や「実践を支える体制」について言及する研究は少ない。そこで「総合的な学習の時間」に関する組織的なカリキュラムマネジメントを持続可能な取組にしていくための「体制づくり」に着目し、勤務校の現状を分析して、強みや課題、改善点を明らかにした上で、体制の再編を行った。業務の効率化の観点からも、今ある組織、役割を工夫し、整理することで、子供の学びを支える「体制」が見えてきた。

## I. はじめに

### 1. 問題の所在

現代は、AIの急速な発展、少子高齢化、新型コロナウイルスの発生、地震や様々な気象災害などにより、社会の構造や雇用環境が、大きくまた急速に変化しており、先の予測が困難な時代になっている。現行の学習指導要領<sup>1</sup>は、「学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること」をねらいとし、変化の激しい社会で、持続可能な社会の担い手を育てていくことの重要性について述べている。

小学校では、2002年4月から「総合的な学習の時間」が創設され、「生きる力」を育み、探究のプロセスへの理解を深め、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくことができる人材の育成を目指すようになった。文部科学省「総合的な学習の時間教科部会」(2019)<sup>2</sup>によると「総合的な学習の時間」の成果として、「知識・技能の定着と思考力・判断力・表現力の育成の両方に繋がっている」ことや「各教科等における探究的な学習の根幹になっている」などが挙げられている。一方で課題として、「『総合的な学習の時間』における取組と各教科等がどのように関連しているかを意識せずに取り組んでいるため十分な効果が得られていない」「指導方法が個々の教師任せになり、学校全体で取り組む体制が整っていない」なども挙げられており、指導方法や指導体制に関する課題を指摘している。今後は、これらの課題解決に向け、組織的にカリキュラムマネジメントの充実を図っていくことが重要であり、そのための「体制づくり」が必要不可欠となる。

「総合的な学習の時間」は、「目標」や「内容」などカリキュラム全般を各学校において設定するも

\*1北海道教育大学教職大学院（大学院教育学研究科高度教職実践専攻）専門職学位課程（現職院生）

\*2北海道教育大学教職大学院（大学院教育学研究科高度教職実践専攻）釧路

のであることから、各学校の裁量が大きく、その教育効果の比較も難しい上に、「実践の在り方」や「実践を支える体制」について言及する研究は少ない。

先行研究として、佐古（2006）<sup>3</sup>は、「個業型組織」の問題や管理職と経験の浅い教職員をつなぐミドルリーダーの重要性について言及している。また、山田（2022）<sup>4</sup>は、防災教育に関するカリキュラムマネジメントに向けた教職員の体制づくりについて、教職員の体制をFT（ファシリテーションチーム）とCS（コアシステム）に分け、それぞれの役割を明確にしながら、実践を支えるシステムについて示している。また、『小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』<sup>5</sup>によると、「総合的な学習の時間」を支える「体制づくり」は、「校長のリーダーシップのもと、育成を目指す資質・能力を明らかにし、教科等横断的な視点をもって教育課程の編成と実施を行うとともに、多様な人々とつながりを持ちながら学ぶことができる教育課程の編成と実施を行うこと」が求められている。これらの先行研究を参考に、勤務校での組織マネジメントや「体制づくり」について検討していく。

これまでの前任校や勤務校での子供の実態としては、「学習意欲の低下」、「粘り強く課題解決に取り組む姿勢」に、近年変容が見られていると感じている。「総合的な学習の時間」が目指す資質・能力の1つに「学習のよさを理解する」というキーワードがあるように、学ぶ楽しさや、試行錯誤を通して課題の解決にたどり着く達成感を味わい、新たな学びへの意欲に変えながら、探究し続ける子供の姿を育んでいけるようにしたい。

## 2. 勤務校の概要

勤務校は、2021年度から校舎分離型の「義務教育学校」となり、前期課程は教職員22名、児童数315名、学級数12クラス、後期課程は、教職員26名、生徒数324名、学級数9クラスで、北海道教育大学の附属学校である。第一著者は、前期課程の教務部に属し、「総合的な学習の時間」のカリキュラムの運営・管理を担当している。勤務校では、「総合的な学習の時間」のより一層の充実に向けて、今年度の学校経営の重点に設定し、各教科の指導と合わせて、「横断的・総合的に探究的な見方・考え方を育むこと」「外部連携やフィールドの拡充を視野に入れたカリキュラムマネジメントの充実」に力を入れている。

「個性と協働性を尊重し、たくましく生きる人間」を教育目標に掲げ、「リーダーシップ・フォローワーシップ」を發揮し互いに自己の強みを生かし、影響力を与え合う授業改善を研究の柱として、小中一貫した教育を目指している。特に、各学年における教科横断的な指導を重視し、学年・学級経営年間プログラム（以下「年プロ」）を作成している。年プロは、高めたい資質・能力を、その教科、その単元にとどめることなく、様々な学習活動の中で發揮することができるよう、意図的、計画的に指導することで、効果的に資質・能力を育むことをねらいとしている。「総合的な学習の時間」では、各教科等を越えた学習の基盤となる資質・能力を育むことをねらいとしており、年プロにおいても、どのように指導時期、内容を計画していくかが重要となる。

## II. 研究の目的

本研究では、「総合的な学習の時間」に関する組織的なカリキュラムマネジメントを持続可能な取組にしていくための「体制づくり」に着目し、勤務校の現状を分析して「強み」や「課題」、「改善点」を明らかにした上で見直し、新たな組織体制を再編する。そして、その体制を基に3～6年生の「総合的な学習の時間」のカリキュラムマネジメントを実践し、その経過について検証することを目的とする。ただし、本稿では、その実践経過における「組織体制の再編」までを記載する。

### Ⅲ. 研究方法

#### 1. 先行研究の検討

##### (1) カリキュラムマネジメントの基本的な考え方とその具体的な取組

田村 (2016)<sup>6</sup>を参考に、教育課程全般におけるカリキュラムマネジメントの基本的な視点や体制に関わる立場、関わり方や具体的なステップを検討する。また、天笠 (2020)<sup>7</sup>より、現行の学習指導要領で示されているカリキュラムマネジメントについて、管理職とミドルリーダーの関わりを中心とした体制づくりについてまとめる。

##### (2) 先進校における実践事例から

2019年2月に行った香川大学教育学部附属高松小学校の視察の結果と、佐古 (2006)<sup>8</sup>、山田 (2020)<sup>9</sup>などの実践レポートをもとに、勤務校の実態に照らしながら、カリキュラムマネジメントに向けた体制づくりの方向性を探る。

#### 2. 実践研究

2022年度の勤務校における各学年の「総合的な学習の時間」の実践を中心に、各学年、各単元で見られる「子供の姿」、指導計画、指導体制、外部連携などを分析し、勤務校の「指導体制」における「強み」「課題」「改善策」を明らかにする。それらを基に、新たな組織体制を再編する。

### Ⅳ. 先行研究

#### 1. カリキュラムマネジメントの基本的な考え方とその具体的な取組

##### (1) カリキュラムマネジメントのPDCAを回す

田村 (2016)<sup>10</sup>は、「カリキュラムマネジメントを行う目的」について、「目標をマネジメントする」、「カリキュラムをマネジメントする」、「カリキュラムでマネジメントする」さらには「カリキュラムのためにマネジメントする」とし、組織全体でマネジメントしていくため、教職員全員で共有し、実践しながら、PDCAサイクルを回していくこと、「体制づくり」はその土台として重要であると述べている。勤務校でも、カリキュラムマネジメントを組織的な取組としていくことを目指し、教職員のそれぞれの「強み」を生かした組織的な実践をしていけるよう体制を作っていく。図1は、田村 (2016)<sup>11</sup>で、学校内・外の教育活動に関する役割を「教育活動」と「経営活動」に分けて示したモデル図である。特に外部連携に関わる体制を再編していく上で参考にしたい。

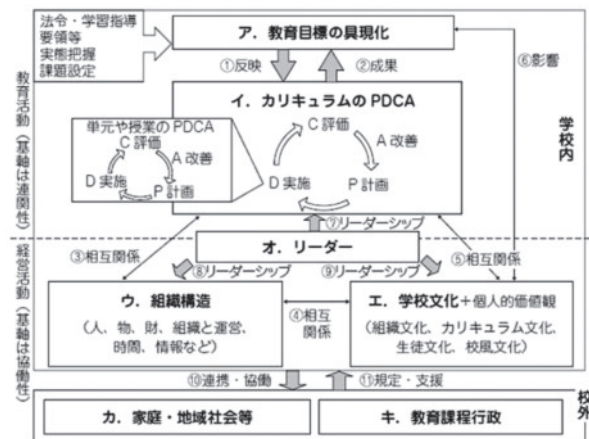


図1 田村 (2016) による カリキュラムマネジメントモデル図より引用<sup>12</sup>

## (2) 組織におけるミドル層の役割の重要性

天笠 (2020)<sup>13</sup>は、カリキュラムマネジメントについて、「資質・能力（コンピテンシー）を基盤とする教育課程は、これまでも増して、教職員に一層の連携・協働と、指導の継続性や積み重ねを求めている」と述べ、管理職を中心とした全教職員による学校のマネジメント機能の強化と共に、学校組織を根本から見直し、資質・能力を基盤とする教育課程の編成・実施・評価するための「運営体制」の構築が求められていることを強調している。また天笠 (2020)<sup>14</sup>は、管理職のビジョンの実現に向けて、ミドルリーダーの働きが重要であることも主張している。ミドルリーダーが、管理職のビジョンをいかに理解し、他の教職員との共有を図っていくかが組織的な取組を機能させていく上で重要となる。天笠 (2020)<sup>15</sup>は、「カリキュラムマネジメントは、教育課程と学年・学級、あるいは教科等を結ぶ営みであり、1人1人の教職員それぞれを結び、学校における“協働”を促し、実現をはかるマネジメントの手立てである」と、協働的にカリキュラムマネジメントを実践することで、組織として、教育課程に対するイメージを広げ、学年・学級経営の目標の実現にもつなげることの重要性についても述べている。第一著者もミドル層の一人として、カリキュラムマネジメントを教育課程の評価・改善にとどめるのではなく、組織体制の評価・改善も意識して、日常の実践を進めていけるようにしたい。

## 2. 先進校における実践事例から

### (1) 香川大学教育学部附属高松小学校の取組

第一著者は、2020年2月に、香川大学教育学部附属高松小学校（以下「高松小」）の視察を行った。高松小<sup>16</sup>は、文部科学省指定のカリキュラム研究開発校として、「2領域カリキュラム」を採用し、教科学習（国語、社会、算数、理科、外国語、図工、音楽、保健体育、家庭科）と創造活動（＝特別活動・総合的な学習の時間・道徳の合科型活動）を設定し実践を行っている。第一著者は、主に、「創造活動」に注目して、授業実践、分科会に参加した。「創造活動」は、大きく「縦割り創造活動」（1～6年まで機械的に選ばれたグループで、「総合的な学習の時間」の探究サイクルを軸に、「価値の創造」を目指した活動を行う）と、「学級創造活動」（各学級において個人テーマを設定し、個の追究を積み重ねる）の、2つの活動が相互に関連し合い、「価値を創造する子供の姿」を引き出していくことをねらいとしている。この「個人の創造の時間」と「縦割り創造の時間」を往還させながら、探究的な見方・考え方を育むためには、学級担任が子供1人1人を丁寧に見取り、評価し、見いだした「強み」を、全教職員で共有することが欠かせない。個の「強み」が活かされているからこそ、主体的な態度が維持され、他学年にも影響を与えるのだとわかり、参考になった。

### (2) 個業化が教育活動に及ぼす影響

佐古 (2006)<sup>17</sup>は、近年の学校現場に見られる「学校経営方針が各教員に浸透していない」ことや「職員会議が事実上意思決定機関になっている、組織的な教育活動が展開されにくく個々ばらばらに教育活動が行われている」などの実態について、「個業型組織」「個業化」と称し指摘している。また、佐古 (2006) は、個業化することにより、「組織構造領域における個別分散、相互作用領域における機能不全ないし抑制、教員の意識領域における自己完結的な教職観の醸成」等から、組織的な取組と比べ、教育活動の変革に対応しにくいことや、さらに、組織的な取組に対する教職員の参画意識を高めるための研修を実施し、その重要性についても言及している。勤務校でも研修やワークショップなどの場を生かして、こうした意識改善へのアプローチも検討していきたい。

### (3) 総合的な学習の時間を組織的に指導することの重要性

山田 (2022)<sup>18</sup>は、防災教育に関するカリキュラムマネジメントを行うための「体制づくり」について言及している。実践前は、防災教育に関する組織自体が不安定で、形骸化されたものであった

が、佐古（2019）<sup>19</sup>を参考に、実践の中核を担う組織CS（コアシステム）とそれを支援するFT（ファシリテートチーム）を組織した。FTには、管理職・教務主任、学年主任などを組織することで、学校の経営方針を踏まえ、活動の全体計画を整備したり、その意図を他の教職員に共有したりする役割を果たしている。また、学校外の協力者との連携体制を構築していることで、CSの実践を広げ深める関わりを通し、子供たちの「防災意識」の高まりにアプローチしている。CSを中心とした実践からの成果や課題を基に、FTで方向性を整理するなど、CSとFTが相互に働きかけることで、組織的な取組が機能していくことが分かる。これらを参考に勤務校でも、運営部（主幹教諭、教務主任、研究主任、研究部副主任）や総合部会（担当、学年主任を中心に組織）を「FT」とし、各学年における「総合的な学習の時間」の実践を支えると共に、マネジメントサイクルを整備していけるようにしたい。

## V. 実践研究

### 1. 2022年度の勤務校の「総合的な学習の時間」のカリキュラムについて

2021年度の成果と課題を基に、今年度、勤務校で作成した「総合的な学習の時間」のカリキュラムを表1にまとめた。

表1 各学年の「総合的な学習の時間」の単元名と概要

|     | 単元①・概要   | 単元②・概要   | 単元③「総合自由学習」  |
|-----|--|--|--|
| 3学年 | <p>「こんなにすてき!附小のまわりの生き物たち」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・附小の森（勤務校の中庭）と阿寒湖畔の森の比較を通して、生き物とその生息環境の関係を明らかにし、身近な環境の大切さについて考え、自分なりに表現する。</li> </ul>           | <p>「ちいきから広がる町づくり」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地域で行われている「町づくり」の実態を捉え、「だれが?なんのために?なぜ?行っているのか」について明らかにし、町づくりについて、自分にできることについて考え、自分なりに表現する。</li> </ul>                     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・日常生活や学習から見出した疑問を基に個人で課題を設定し、これまでの探究の見方・考え方を発揮しながら探究活動を行う。</li> </ul> |
| 4学年 | <p>「守ろう、釧路の豊かな水」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・釧路の水源地探しを通して、「川のはじまり」を見付け、水と森林の関係について明らかにし、森林の大切さについて考え、自分なりに表現する。</li> </ul>                           | <p>「石炭のひみつを探ろう」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・釧路の石炭産業と釧路市の成り立ちの関係について調べ、産業の発展と町づくりの関係について明らかにし、今後の釧路の産業の発展の在り方について考え、自分なりに表現する。</li> </ul>                               |  |
| 5学年 | <p>「阿寒の森を守り隊」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・釧路の林業に着目し、人の営みで森林が維持・保全されていることを理解するとともに、「林業」を支える市民生活の関係を明らかにし、身近な環境を守るためにできることについて考え、自分なりに表現する。</li> </ul> | <p>「学校を創り上げよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「次年度、最高学年として必要な力は何か」をテーマに、全校集会を企画する活動を通して、上級生として、下級生を支え、共に活動する意義について考え、自分なりに表現する。</li> </ul>                                |  |
| 6学年 | <p>「地球のたからを明日へつなげよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・阿寒の森のシカの食害の現状を理解し、対策としてのネット巻き体験を通して、生き物との共存の在り方について考え、生態系を維持する大切さについて考え、自分なりに表現する。</li> </ul>       | <p>「北海道の歴史を探れ」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教科書には示されていない縄文時代・弥生時代の北海道の歴史について探る活動を通して、北海道（特に道東）に独自に発展した文化について理解を深め、各地域で受け継がれてきた文化を尊重した生活の在り方について考え、自分なりに表現する。</li> </ul> |  |

単元①は、阿寒湖摩周国立公園の一部を学校園とし、子供たちの学びの森として、昆虫の生態や水源地の様子、林業の実態、生態系維持のための食害対策に取り組む様子などについて、体験を通して

学び、その学びを生かして、身近な自然との向き合い方を考えていく単元である。

単元②は、地元釧路市をテーマに、町内会の働き、基幹産業の役割、町の歴史について学んだり、下級生との関わりを通じた創造活動を通して、人との関わりや社会参画の在り方について考えたりして、自己の生き方を見つめ直すことをねらいにした単元である。

単元③では、①と②の学びを生かし、自らテーマを設定し、個人探究する活動を基本とし、探究的な見方・考え方を働かせ、テーマに対して、様々な視点から考え、自分なりの考えを導出することで、自己の生き方を見つめ直す力を育む単元である。

この3単元は、学年を通して大きくりの共通テーマを設けることで、発達段階に合わせて、探究的な見方・考え方を育み、テーマに対する自己の考えの変容に気付くことで、自己の生き方を見つめ直す機会となるよう設計している。

## 2. 今年度の「総合的な学習の時間」に関するカリキュラムマネジメントの計画

今年度の「総合的な学習の時間」のカリキュラムマネジメントの計画について表2にまとめた。この計画は、今年度の各学年における3つの単元の実施に合わせて、カリキュラムマネジメントに関わる取組とその時期を整理したものである。基本的には、単元実施前、途中、実施後に担当と各学年担任で面談を実施し、子供の姿を基に単元計画の見通しの確認や修正を行う。また、年度末には、1年間の取組全体について振り返り、次年度に向けた単元計画の作成、その他の必要な準備について話し合う。

表2 勤務校の「総合的な学習の時間」のカリキュラムマネジメントの計画

| タイトル          | 期間     | 内容  |
|---------------|--------|---|
| 次年度に向けて       | 3月     | 2021年度の実践を基に、各学年担任と面談を実施する。単元計画、各教科との連携、フィールド、外部連携について、成果と課題を整理する。                            |
| 今年度の取組に向けて①   | 4・5月   | 2022年度の「総合的な学習の時間」の単元計画を作成し、担当と各学年担任で内容の共有を図る。  |
| 今年度の取組に向けて②   | 6月     | 「総合的な学習の時間」に関する教職員へのアンケート調査を実施し、「組織的な取組」「各教科連携」「外部連携の整備」などの視点で意見を聞く。                          |
| 単元①の実践        | 6～9月   | 単元①開始に伴い、各学年における「単元で目指す子供の姿」や指導上必要なフィールドや外部連携などに基づいて、単元計画を修正する。                               |
| 単元①の実践を基に前期反省 | 10月    | 単元①の実践を踏まえ「どのような資質・能力が高まったか」について子供の見取りを基に整理する。単元のねらいに迫るために必要なフィールドや外部連携の可能性について振り返る。          |
| 単元②の実践        | 11～12月 | 単元②の実践開始に伴い、各学年における「単元で目指す子供の姿」や指導上必要なフィールドや外部連携などに基づいて、単元計画を修正する。                            |
| 単元②の実践を基に反省   | 1月     | 単元②の実践を踏まえ「どのような資質・能力が高まったか」について子供の見取りを基に整理する。単元のねらいに迫るために必要なフィールドや外部連携の可能性について振り返る。          |
| 単元③の実践        | 2月     | 単元③の実践開始に伴い、各学年における「単元で目指す子供の姿」や指導上必要なフィールドや外部連携などに基づいて、単元計画を修正する。                            |
| 年度末反省         | 3月     | 単元③および年間を通しての実践を踏まえ「どのような資質・能力が高まったか」について子供の見取りを基に整理する。単元のねらいに迫るために必要なフィールドや外部連携の可能性について振り返る。 |

## 3. 2022年度の計画に向けた各学年主任と担当（第一著者）との面談の記録

「総合的な学習の時間」におけるカリキュラムマネジメントサイクルを回していく上で、これまでの実践をもとに、「子供の様子」、「単元構成」、「実施時期」について、担当（第一著者）と学年主任で、個別に面談を行った。面談は2022年3月に、対話のゴールを設定せず、実践を通して感じたことを率直に語っていただくことで、今後のカリキュラムマネジメントの「課題」を見つけていくことを

ねらいに実施した。面談の内容は当事者の許可を得て録音し、録音したものを文章に整理している。表3は、第一著者が、各学年団の担任と面談し、天笠(2020)<sup>20</sup>の2つの視点「教科等を横断した教育課程の改善」、「社会との連携・協働体制の強化」を基にキーワードを抽出したものである。

聞き取り調査の結果、各学年によって子供の「探究する姿」をどう支援するか、「探究のサイクルを回す子供の姿」をどうイメージしているかなど、教師の「指導計画」「関わり」「評価」が不明確であることがわかった。また、単元計画を1つの方向性と位置付け、子供の疑問、思考、主体性に合わせて、調整していく必要性が共有されておらず、「既存の単元計画通りに実施しなければいけない」と捉えたり、逆に「子供に合わせて行うのだから、計画はないようなもの」と考えたりするなど、認知に大きく差があることも見えてきた。子供の主体性を育む探究活動を保障するためにも、個人のテーマで課題追究する「総合自由学習」の位置付けが、重要になってくる。個のもつ強み・よさを生かし、これまで身に付けてきた「問題解決の力」を発揮しながら、自分の追究したいテーマと向き合うことで、学びに没頭する姿を引き出していくことが、個別最適な学びを実現する上で重要な位置付けになる。また、こうした姿を引き出す、教師の適切な関わりとして、探究の過程における個の学びが停滞したり、他人の情報を欲したりしたタイミングで、他者との繋がりを促すことで、協働的な学びが保障される。ここで見えてきた課題「カリキュラムにおける課題」「指導体制整備に関わる課題」「運営体制の整備に関わる課題」また「指導の具体的な方策」を関連させながら、カリキュラムマネジメントを行っていくことが重要であり、その「体制づくり」を進めていきたい。

表3 各学年担任との面談の記録

|  |
|--|
| <p>(1) 3学年担任：A教諭（2022年3月16日15時～16時、於勤務校実践開発室）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「子供たちは、探求している自覚はない。教師も、意識した指導が不十分。」</li> <li>・「昆虫とすみかの関係を捉え、まとめるという流れはあるが、目的（表現物の作成）に向かって、必要な知識を集めて、まとめている姿が多く、『主体性』に課題がある。」</li> <li>・「実施時期に問題はないが、体験を多く取り入れることや、試行するといった活動・体験が不足していたと感じている。」</li> </ul>  |
| <p>(2) 4学年担任：B教諭（2022年3月16日16時～17時、於勤務校実践開発室）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「探究するフィールドが、学校が中心になってしまった。」</li> <li>・「地域の方に来てもらい、話を聞くことで、キンレンカ（テーマ）を通して、自分たちの生活と町づくりに関わる『ひと』のつながりが見えた。」</li> <li>・「地域の方からのインタビューは1人の方からのお話ししか聞けていないので、偏った意見に受け取りがち。」</li> <li>・「前の学年の取組が不明。」</li> </ul>   |
| <p>(3) 5学年担任：C教諭（2022年3月16日17時～18時、於勤務校実践開発室）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「探究する態度、基本的な技能の定着に課題、自己の課題設定ができない。」</li> <li>・「教科ありきの単元になっている。国語の単元終末の言語活動を充実させただけ…これが、横断的というのだろうか。」</li> <li>・「表現する相手ははっきりしていることで、相手意識をもち、目的をもって、まとめ・表現に入っていた。」</li> <li>・「実施時期は、短かった。他の単元との兼ね合いで、調整が必要となる。」</li> <li>・「(前年度までに)どこまで探究的な見方・考え方が身に付いているのかが不明確。」</li> </ul> |
| <p>(4) 6学年担任：D教諭（2022年3月16日18時～19時、於勤務校実践開発室）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「各自で課題設定ができない。」</li> <li>・「単元構成上、主たる学習対象が、遠方にあるため（阿寒湖畔の森）、『1回の体験活動で、何をねらいとするか』が重要になってくる。」</li> <li>・「実施時期については、概ね問題ないが『総合自由学習』の時間を、ゆとりをもって確保してあげることが、問題解決の力を高める上で、重要になる。」</li> </ul>   |

#### 4. 「総合的な学習の時間」に関する教職員へのアンケート調査の結果と考察

『小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』<sup>21</sup>では、カリキュラムマネジメントの視点とし

て、校内の教職員が一体となり協力できる体制をつくるなどの「校内組織の整備」、確実かつ柔軟な実施のための「授業時数の確保と弾力的な運用」、多様な学習活動に対応するための「空間、時間、人などの学習環境の整備」、学校が各家庭や地域と連携・協働しながら取り組む「外部連携の構築」の4つが示されている。勤務校でも、これらを参考にしながら、現状の課題を明らかにするために、今後の「体制づくり」に関わるアンケート調査を実施した。アンケート調査は、2022年6月17日に、4件法を用いて、「組織的な取組」「外部連携」の2つの視点で勤務校教職員10名を対象に実施した。

設問1は、「総合的な学習の時間」について、どれだけ組織的に指導できているかを問うものである。「そう思う」「まあまあそう思う」の肯定的な意見が90%と高い数値を示している。理由には、カリキュラム作成を教務部で管理しているため、カリキュラムを通して、「学年と分掌の連携」が整備されていることに触れて回答していることがわかる。しかし、「総合的な学習の時間」のカリキュラムマネジメントで示される4つの視点と照らし合わせると、「校内組織の整備」に留まっており、他の視点を踏まえた体制整備を今後も充実させていく必要があると考える（図2参照）。

設問2は、「総合的な学習の時間」についてどの程度、地域・外部連携を充実させた指導ができているかを問うものである。「そう思う」「まあまあそう思う」の肯定的な意見が、80%を占めている。要因としては、近年の「PTAゲストティーチャープロジェクト」を中心に、外部協力者を積極的に活用した指導体制の整備が進んでいるからだと考えられる。これまでは数年間、新型コロナウイルス感染症拡大のため、外部協力者との接触を制限していたこともあり、そうした時期との比較から肯定的な意見が多く出たものと考えられる。一方で、「新しい連携の在り方を模索したい」という意見や連携の固定化を懸念する意見もある。連携の固定化は、体制の安定という側面と、連携に合わせて内容を制限してしまうことで、児童の思考を主体とした探究のプロセスが保障されないという側面がある。児童の思考に合わせて、選択したり、内容を変えたりできる「体制」の柔軟性も求められる（図3参照）。

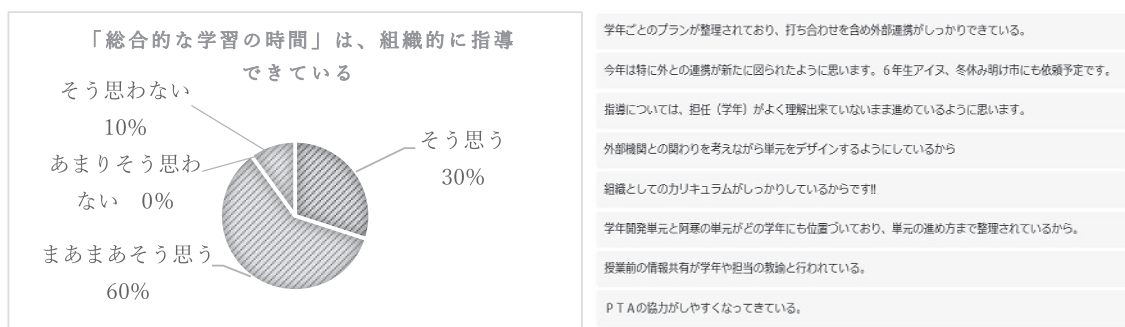


図2 設問1「組織的に指導できている」の回答結果とその理由

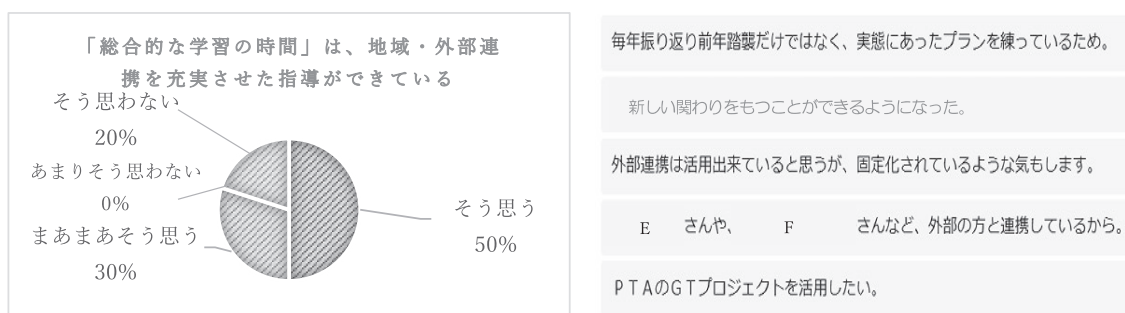


図3 設問2「地域・外部連携を充実させた指導ができている」の回答結果とその理由



## 5. 単元スタートに関わる学年担任と担当（第一著者）の面談

単元開始にあたり、学年担任と担当（第一著者）で、2022年5月から6月に、「その単元で高めたい探究の見方・考え方について」、「各プロセスにおける外部連携の可能性・必要性について」、「各教科との関連について」の3点を中心に面談し、許可を得て録音して記録・文字起こしし、学年担任の思いを分析しながら、単元の見通しをもって指導に当たれるようにした。ここでは、実践の具体として、5学年の担任団との面談の記録を抜粋し記載する。

2022年6月16日15時～16時に、勤務校会議室にて5学年J教諭、K教諭と面談を実施した。5学年の担任からは、「どの教科と関連しているのか?」「各教科の学びがどの場面で、どのように発揮されているのか」など、特に「各教科との連携を意識した単元構成」に課題意識が感じられた。

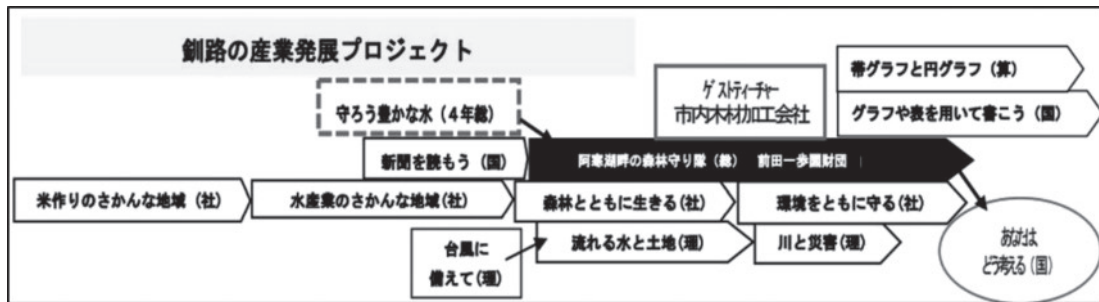


図4 5学年の総合「阿寒の森を守り隊」と各教科の関連（年プロの一部抜粋）

図4は、5学年の総合的な学習の時間のカリキュラムと各教科の関連を示した「年プロ」の一部である。これを基に、学年担任と担当で、単元の導入、展開、終末、アウトプットの媒体や対象などを確認していった。「年プロ」は、年間を通した指導計画の見通しをもつために、重要な役割を果たしている。また、実践で見られた子供の姿を基に、その都度、改善・修正を図りながら次年度に引き継いでいくことで、より実用的な計画として機能する。「総合的な学習の時間」の準備、指導についても、これを活用することにより、見通しをもって計画的に進められるようにしたい。今後、「体制づくり」を進めていく中で、「年プロ」の活用についても検討していく必要がある。

## 6. 小括

### (1) 今年度の実践から見えた勤務校の「強み」

勤務校の「総合的な学習の時間」は、毎年の子供の実態に合わせて、目標や目指す子供の姿、単元計画を改善、修正を加えながらカリキュラムマネジメントを進めている。また、学校の全体計画を軸に、高めたい資質・能力を発達段階に合わせて整理し、単元の中で重点となる資質・能力が発揮されたり、鍛えられたりする場面を明らかにすることで、適切な指導計画を立てたり、子供の学びが担保されたりするとともに、実践について一定の成果、課題を見いだすことができている。こうした実践の積み重ねが勤務校の強みの1つと言える。

勤務校は、教職員22名の内、約8割が20～30代で構成されている。特に、「ミドル層」と呼ばれている年代（30代～40代）の教員が7割以上を占め、経験年数の浅い教員や管理職との連携を密にしながら、全教職員が学校運営に参画しやすい環境づくりを目指して実践を進めている。

また、勤務校では「年プロ」を活用した指導計画の作成、実践、評価、改善の取組が、カリキュラムマネジメントと深く関連していることが明らかになった。各教科と「総合的な学習の時間」で育まれる資質・能力が互いに発揮されるように、単元の配列や指導内容を工夫していくことが重要となる。また、こうした取組を、担当や担任だけのものにせず、組織的に実践していく体制づくりも大切

になってくる。

## (2) 今年度の実践から見えた勤務校の「課題」と「改善点」

上記の「強み」をさらに生かしていくには、学年・学級の枠を越えて、見取りを共有したり、日常的に計画を相談したりするなど組織的な取組が重要となる。しかし、3月の面談やアンケートからは、教員が担当する学年の前後の学年の内容を理解していなかったことや、「どのような活動を経て、現状に至っているのか」について、理解していなかったことが明らかになった。また、カリキュラム自体が探究に耐えうる課題を生み出すことが可能かや、「体験」を通して情報収集したり、試行しながら自らの考えを構築したりしていく活動や場の設定、表現の対象が不足していることが見えてきた。こうした課題の改善に向けて、「体制づくり」を通して、日常的な共有の場を設定したり、役割を整理したりするなど必要な手立てを講じるだけでなく、取組が持続していくようにしていくことを目指していきたい。

義務教育学校として、「総合的な学習の時間」の4年間、さらには7年間の系統性を整理していくことで、学年や担任が変わっても、全教職員の共通理解のもと、子供に関わることができるようにする必要がある。各学年の活動のねらいや子供の様子などが常に可視化されるよう、単元計画や学びをどう蓄積し活用していけるようにするかについても検討したい。

## 7. 総合的な学習の時間の体制づくりについて

前節で述べたように、勤務校の「総合的な学習の時間」の実態を分析した結果、組織的に実践していく体制づくりが必要なことが明らかになった。そこで図5に、勤務校において、現状の「総合的な学習の時間」の実践に向けて機能している役割を挙げた。管理職の全体計画をもとに、担当と担任団で単元の修正を図りながら実践を進めている。しかし、これでは、一部の教職員の関わりにとどまっていたり、学年の先生に任されている割合が大きくなりすぎたりなど、個業化が加速する不安がある。

そこで、図6のように、既存の役割・立場が、どのように「総合的な学習の時間」のカリキュラムマネジメントと関係しているのかについて、改めて整理するところから進めることにした。今後は、前期の終了を目途に、図6について、管理職・主幹教諭と協議を行った上で、課題を明らかにし、運営体制および指導体制が機能していくように体制を再編する。第一著者は、担当として、管理職、主幹教諭、研究主任、学年主任らと「総合部会」を組織し、日常の実践の蓄積と共有、単元計画の見直しを図っていく。その際、後期課程との接続をよりスムーズにすることで、7年間一貫した「総合的な学習の時間」のカリキュラムについても検討していきたい。

## VI. まとめと考察

勤務校の「総合的な学習の時間」は、特色的な活動を生かしたり、地域の素材を活用したりしながら、子供の興味・関心に基づいて整理されていることによさがある。今後、このよさを土台にしながら、より探究的な見方・考え方を発揮したり、多様な「ひと、もの、こと」との触れ合いを通したりして、体験または体験的な活動を取り入れていけるようにする必要がある。

ここまでの文献研究と実践の分析から、勤務校での「総合的な学習の時間」に関するカリキュラムマネジメントと体制づくりに関する成果と課題、改善点が明らかになった。カリキュラムマネジメントの視点では、各学年・各単元のテーマと関わるための教材や活動が少なく「体験」の機会が保障されていないことや、テーマとの出会いの場面で「どうしたら子供が自ら解決したい課題を見いだしていくことができるか」という点で、テーマの合わせ方が指導する教師任せになっていたり、子供の

◎現状機能している体制 (Before)



図5 現状の指導体制

◎改善案(After)



図6 今後の体制案

姿が想定しにくかったりすることがあるとわかった。田村 (2016)<sup>22</sup>は、探究的な学習について、「答えが1つとは定まらない、解決したと思えば新たな課題が生まれる学習」と述べているように、様々な問いを含んだり、問いが連続していったりするような「探究に耐えうるテーマ」であるかどうかについては、今後も実践しながら、検討していきたい。

また、地域・外部連携や各学年の取組・子供の姿が全教職員に共有されていないなど、体制面の課題も見えてきた。そうした課題に対し、勤務校では、学校運営に対して参画意識の高いミドル層が多くの割合を占めていることや、研究部を中心とした「リーダーシップ、フォロワーシップを發揮した授業改善」を軸に子供の姿を見取り、子供の姿を中心とした学級経営、カリキュラムマネジメントに力を入れて取り組んでいる実績があり、これを生かして、上記の課題の解決を目指していく。今後は、再編した体制を土台に、「総合的な学習の時間」の実践およびカリキュラムマネジメントをさらに進める。具体的には後期(10月)からスタートさせ、この実践も踏まえて、組織的にカリキュラムマネジメントを進めていく大切さとそれを支える体制の在り方について検討していく。これらの取組は、全てよりよい子供の成長や学びにつながる。「総合的な学習の時間」を通して、子供が、自ら課題を見だし、多様な「ひと、もの、こと」と関わりながら課題を解決する力を身に付けたり、解決することのよさを実感したりする姿を今後も目指していく。

〈注〉

- <sup>1</sup> 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』東洋館出版社、2019年、p.1
- <sup>2</sup> 文部科学省「総合的な学習の時間教科部会」(資料2-1)、2019年、p.3  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/\\_icsFiles/afiedfile/2018/10/10/1409925\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afiedfile/2018/10/10/1409925_4.pdf)  
(2022年7月25日閲覧)
- <sup>3</sup> 佐古秀一「学校組織の個業化が教育活動に及ぼす影響とその変革方略に関する実証的研究—個業化、協働化、統制化の比較を通して」鳴門教育大学研究紀要、第21巻、2006年、pp.41-54
- <sup>4</sup> 山田英美「防災教育に関するカリキュラムマネジメントに向けた教職員の体制づくり」佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要、第6巻、2022年、pp.399-421
- <sup>5</sup> 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』東洋館出版社、2019年、p.129
- <sup>6</sup> 田村知子『カリキュラムマネジメントハンドブック』日本標準、2016年
- <sup>7</sup> 天笠茂『新教育課程が創る学校経営戦略』ぎょうせい、2020年
- <sup>8</sup> 佐古秀一 前掲書
- <sup>9</sup> 山田英美「防災教育に関するカリキュラムマネジメントに向けた教職員の体制づくり」佐賀大学 大学院学校教育学研究科紀要、第6巻、2022年、pp.399-421
- <sup>10</sup> 田村知子 前掲書、pp.68-76
- <sup>11</sup> 田村知子 前掲書、p.37
- <sup>12</sup> 田村知子 前掲書、p.37
- <sup>13</sup> 天笠茂 前掲書、p.162
- <sup>14</sup> 天笠茂 前掲書、pp.164-166
- <sup>15</sup> 天笠茂 前掲書、p.169
- <sup>16</sup> 香川大学教育学部附属高松小学校『香川大学教育学部附属高松小学校教育研究大会研究紀要』、2019年
- <sup>17</sup> 佐古秀一 前掲書、pp.41-42
- <sup>18</sup> 山田英美 前掲書
- <sup>19</sup> 佐古秀一『管理職のための学校経営R-PDCA—内発的な改善力を高めるマネジメントサイクル』明治図書出版、2019年
- <sup>20</sup> 天笠茂 前掲、pp.205-227
- <sup>21</sup> 文部科学省 前掲、pp.129-130
- <sup>22</sup> 田村知子 前掲書、p.118